

# 第 431 回広島精神神経学会 プログラム・抄録

平成 29 年 12 月 9 日(土)  
リーガロイヤルホテル広島

# 第 431 回広島精神神経学会プログラム

## I. 一般演題(1) 15:00~16:00

座長：町野 彰彦 先生（広島大学病院精神科）

1. 精神症状を主症状として発症した原発性副甲状腺機能亢進症の一例  
藤田 翔 先生（広島大学病院 精神科）
2. 自閉症スペクトラム障害で通院中に意欲低下、食欲低下を認め、脳悪性リンパ腫と診断された一例  
瀬分 盛央 先生（広島大学病院 精神科）
3. ミルタザピンの通常用量投与でセロトニン症候群を発症した一例  
安田 由美 先生（県立広島病院 精神神経科）
4. 当院における周産期トータルサポートチームの活動  
岩本 崇志 先生（広島市立広島市民病院 精神科）
5. 児童相談所における PCIT(親子相互交流療法)の取り組み  
安常 香 先生（広島県西部こども家庭センター）
6. 55 歳 男性 強迫性障害の症例の治療経過について  
吉田 玲夫 先生（医療法人社団吉田会 吉田病院）

## Ⅱ. 一般演題(2) 16:00～16:50

座長：高畑 紳一 先生（県立広島病院精神神経科）

7. 悪性症候群改善後に悪性緊張病が疑われた患者に電気けいれん療法(ECT)を施行し奏功した一例  
土井 勉 先生（広島大学病院 精神科）
8. 治療に難渋した回避制限性食物摂取症について  
上敷領 俊晴 先生（広島大学病院 精神科）
9. IPS 個別就労支援の効果と可能性  
林 輝男 先生（社会医療法人清和会 西川病院）
10. 失敗することを予想する前に、まず挑戦すること —行動経済学と患者支援—  
石橋 健一 先生（社会福祉法人広島厚生事業協会 府中みくまり病院）
11. 広島県立総合精神保健福祉センターにおける集団プログラム  
佐伯 真由美 先生（広島県立総合精神保健福祉センター）

### Ⅲ. 特別講演 17:00～18:00

「思春期の理解と家族の接し方 ー親ガイダンス入門ー」

座長：山脇 成人 先生（広島大学特任教授）

演者：西村 良二 先生（福岡大学総合医学研究センター 教授）

# 広島精神神経学会抄録

## I. 一般演題(1)

### 1. 精神症状を主症状として発症した原発性副甲状腺機能亢進症の1例

広島大学病院 精神科

○藤田翔、岡田剛、岡本泰昌

原発性副甲状腺機能亢進症(PHPT)では、様々な身体・精神症状が出現し、非典型例では精神疾患と誤認される可能性がある。今回我々は、精神病症状を伴う重度のうつ状態を主訴に当科を紹介受診したが、精査により PHPT による症状精神病と診断し、向精神薬を使用することなく完全寛解に至った症例を経験した。鑑別を含めた本症例の診断の妥当性、副甲状腺機能亢進症と精神症状に関して、文献的考察を加えて報告する。

### 2. 自閉症スペクトラム障害で通院中に意欲低下、食欲低下を認め、脳悪性リンパ腫と診断された一例

広島大学病院 精神科

○瀬分盛央、撰尚之、岡本泰昌

症例は 43 歳女性。X-15 年より自閉症スペクトラム障害として当科外来に通院していた。長期間安定していたが、X 年 6 月頃より意欲低下、食欲低下などを呈し、抑うつ状態が疑われ、7 月任意入院となった。入院後より歩行障害や尿失禁、認知機能低下が目立ち、頭部 CT で前頭葉に広範な浮腫を伴う腫瘍性病変を認めた。器質的評価の重要性が示唆された症例であったが、今回若干の文献的考察を加えて報告する。

### 3. ミルタザピンの通常用量投与でセロトニン症候群を発症した一例

県立広島病院 精神神経科

○安田由美、小林弘典、西村健一郎、片岡努、住吉秀律、高畑紳一

セロトニン症候群はまれな副作用であるが、死に至る可能性もあり、重大な副作用に位置付けられている。今回、抗うつ薬の通常用量投与でセロトニン症候群を発症した症例を

経験したので報告する。症例は 83 歳女性。X 年 8 月、食欲不振で当院外科入院。抑うつ症状あり、当科紹介。うつ病の診断でミルタザピン 7.5mg 開始。15mg に増量したところ、振戦、ミオクローヌス等が出現。ミルタザピン中止後、症状は速やかに消失した。

#### 4. 当院における周産期トータルサポートチームの活動

広島市立広島市民病院 精神科

○岩本崇志、倉田明子、和田健

周産期はうつ病などの精神疾患の発症リスクが上昇し、後期妊産婦死亡の 25%が精神医学的要因であるという報告も見られる。さらに、母親の精神状況が胎児にも影響することが知られており、精神疾患合併妊婦に対して早期発見、早期介入する必要がある。この為、当院において 2016 年 3 月より多職種による周産期トータルサポートチームを立ち上げたため、その現状について若干の考察を含め報告する。

#### 5. 児童相談所における PCIT(親子相互交流療法)の取り組み

広島県西部こども家庭センター

○安常香

PCIT (Parent-Child Interaction Therapy : 親子相互交流療法) は 1974 年に Eyberg 博士により考案され、行動障害のある児童とその親を対象にしたオペラント条件づけモデルを使用した治療法である。わが国では 2008 年に導入され、児童虐待の予防や改善、里親子の関係強化、DV 被害母子の関係修復にも対象が拡大し、エビデンスに基づく治療として位置づけられている。当センターでは 2016 年より取り組みを開始しており、その実践状況について報告する。

#### 6. 55 歳 男性 強迫性障害の症例の治療経過について

1) 医療法人社団吉田会 吉田病院

2) 広島都市学園大学

3) 大野研究所

○吉田玲夫<sup>1)2)</sup>、吉田昌平<sup>1)</sup>、大野裕<sup>3)</sup>

「電気製品から火事が起きるのでは」「水道から水漏れしている」という強迫観念やそ

の不安を打ち消すための強迫行為を主訴として当院初診された 55 歳男性。ご本人が 20 年以上苦痛を感じてこられた尋常性乾癬の問題に協働的に取り組むことで治療的信頼関係をえ、強迫症状に対し曝露反応妨害法などの認知行動療法や、抗うつ薬を主体とした薬物療法を行い、症状の軽減や精神的苦痛の軽減が認められた。本例の治療経過について報告したい。

## II. 一般演題(2)

7. 悪性症候群改善後に悪性緊張病が疑われた患者に電気けいれん療法（ECT）を施行し奏功した1例

1) 広島大学病院 精神科

2) 国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター 精神科

3) 国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター 臨床研究部 精神神経科学

○土井 勉<sup>1)</sup> 神垣 伸<sup>2)</sup> 大賀健市<sup>2)</sup> 長嶋信行<sup>2)</sup> 大盛 航<sup>2)3)</sup> 朝倉岳彦<sup>2)</sup> 板垣圭<sup>2)3)</sup> 竹林 実<sup>2)3)</sup>

症例は43歳女性。X-9年に幻聴を認め統合失調症と診断。X-4年に緊張病症状に対して薬物治療で改善。X年に緊張病症状が再燃し、薬物療法で治療したが、悪性症候群となり加療された。数日後に敗血症性ショックのため当院に搬送。ショック状態、感染症は改善傾向だったが、昏迷、高熱、頻脈、高血圧および筋緊張が持続し、悪性緊張病を疑いECTを施行し、運動の稚拙さは残存したが、精神症状および自律神経症状は著明に改善した。

8. 治療に難渋した回避制限性食物摂取症について

1) 広島大学病院 精神科

2) 県立広島病院 精神神経科

○上敷領俊晴<sup>1)</sup>、小林 弘典<sup>2)</sup>、安田由美<sup>2)</sup>、西村 健一郎<sup>2)</sup>、片岡努<sup>2)</sup>、住吉秀律<sup>2)</sup>、高畑紳一<sup>2)</sup>

回避制限性食物摂取症(ARFID)は、DSM-IVの幼児期または小児期早期の哺育障害から拡大され、DSM-5で新たに定義された診断概念でDSM-5から成人に対しても適用可能となった。従来の神経性無食欲症の診断基準に当てはまらず、特定不能の摂食障害と診断していた症例の中にARFIDと診断される症例があると考えられる。しかしARFIDを診断する意義や治療方針についての検討は十分でなく症例の集積が望まれている段階である。今回、我々は入退院を繰り返し治療に難渋している摂食障害で回避制限性食物摂取症と診断される症例を経験したため、若干の文献的考察を交えて報告する。

9. IPS 個別就労支援の効果と可能性

社会医療法人清和会 西川病院



○林輝男

本邦の精神障害者向け就労支援は、広範な訓練の後就労を図るという形体を主流としている。一方、IPS (Individual Placement and Support: 援助付き個別就労支援)は、直ちに一般就労を目指し就労先でスキル向上を図ること、効果と条件を科学的に検証しエビデンスに基づいて支援することを特徴としている。われわれは米国の原型を厳守したIPSを実践しているのでその効果と可能性について紹介する。

10. 失敗することを予想する前に、まず挑戦すること —行動経済学と患者支援—

社会福祉法人広島厚生事業協会 府中みくまり病院

○石橋健一

行動経済学は人間の非合理性に注目した経済学です。近年の錯覚に関する科学知見により2002年にダニエル・カーネマンは心理学研究者として史上初めてノーベル賞を受賞しました。その後も行動経済学は経済学にとどまらず、政治、社会科学、組織論、教育等々、広範な領域に影響を及ぼしつつあります。今回この行動経済学の視点から患者支援を再考しました。

11. 広島県立総合精神保健福祉センターにおける集団プログラム

広島県立総合精神保健福祉センター

○佐伯真由美、白尾 直子

当センターは公的相談機関として住民の相談に応じているが、個別相談に加え、数種類の集団プログラムも行っている。ひきこもりや依存症などの問題を抱える方は医療につながりにくく、当事者や家族が対処法もわからず孤立感を抱えており、集団プログラムから得られるメリットも多い。当センターで行っているプログラムの概要と、効果検証を行っているプログラムについてはその結果を発表する。

### Ⅲ. 特別講演

#### 「思春期の理解と家族の接し方 ー親ガイダンス入門ー」

福岡大学総合医学研究センター

○西村良二

思春期の本人は受診を拒むが、親は子どもの言動を心配して相談を求めてくる 경우가少なくない。このような場合に、親の子ども理解を援助して、親の親機能を強化する両親ガイダンスを施行することがある。本講演では、親ガイダンスの構造と過程を紹介するが、もっとも強調されるべきは、困り果てている思春期の子どもの姿を親自身が理解していくのを援助すること、である。親は親ガイダンスの援助を受けて、それ以前には理解することができなかった子どもの感情や行動、思考について理解する。そして、この新たな理解に基づいて親としての新たな対応をとるようになるのである。

親ガイダンスは、親に対する個人精神療法ではないが、親ガイダンスを介して親が自分の神経症的な問題を解決していくことにつながることもある。

また、家族の機能や、家族の始まりとしての結婚についても考察をおこなう